

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	教師はどうありえるのか : 10年間のフィールドワークを踏まえて
Author(s)	藤田, 善
Citation	学習開発学研究 , 13 : 22 - 24
Issue Date	2021-03-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050798
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



【随想】

教師はどうありえるのか

—10年間のフィールドワークを踏まえて—

藤田 善

みなさんは「教師」という仕事にどのようなイメージを持つだろうか。高校生の頃の私にとって「教師」という仕事は、夏目漱石や中島敦、あるいはワイトゲンシュタインがそうであったように、何者かになれなかったり何かを成せなかったりした際—あるいはワイトゲンシュタインのように何か心に痛みを癒すために—自身の知識を活かして就く仕事であったし、今もなおそのような認識である。自身の関心は別のところにあるものの、他方で何か職業に就かねばと考えたとき、自身の特性を考慮して就く仕事の1つが「教師」である。このように書くと「教師」の「崇高な使命」を汚すように聞こえるかもしれないが、それは全く異なる。私は「教師」という仕事に対して、ニュートラルな立場をとる。他の仕事と同様に「教師」も数ある仕事の中の1つであり、それ以上でもそれ以下でもないというのが、私の基本的な考えである。つまり高校生の頃の私は、なりたいたいものになればなるし、なりたいたいものになれなかったら教師をしようと考えていたのである。

そう考えていた私は、大学の教育学部に進学して衝撃を受けた。世の中には、自ら進んで第一希望に「教師」を設定する若者がたくさんいることを痛感した。それと同時に、自身の考えの甘さを恥じた。「教師」の仕事はどうやら他の仕事とは異なるらしい。「教師」という仕事に就くことは何か特別な思いや覚悟が必要な事象のようだ。周りの友人たちの眩しすぎる言葉から、それらがひしひしと伝わってきた。しかし一方で、では「教師」になることは他の仕事に就くことと一体どこが違うのかという問いに、自分でも明確に答えられずにいた。

そんなとき、大学4年の卒業論文のテーマを考えるゼミの最中、樋口先生になんとなくそのような話をする機会があった。「教師」になることはそんなに特別なことなのか。そもそも「教師になる」という言葉自体に何か抵抗感を感じる。自分でも問題の所在がどこにあるのかも分からないまま、思う言葉を口にしてみた。すると樋口先生は、水を得た魚のごとく、たくさんのお話して下さいました。「仕事」についての考察や「仕事」と「遊び」との関係性、教師論の研究など、次から次へとお話が続き、最後に「君のテーマは決まったね」と笑顔で言われ、福田定良の『仕事の哲学』という一冊の本を紹介された。

その後、樋口先生の下で卒業論文を書き上げた。その過程で、樋口先生の膨大な知や多彩な視点の持ち方、そして考えることの難しさと面白さに触れ、大学院に進学することにした。

大学院を修了後、私は縁あって高校の数学教師の仕事に就いた。とうとう「教師」の仕事が始まったのである。社会学者の佐藤郁哉は『フィールドワーク: 書を持って街へ出よう(増訂版)』の中で「フィールドワークというのは・・・居心地よく暮らしている自文化の懐から飛び出し、あえて居心地の悪い調査地に飛び込むことによって、その地の文化を知ろうとする作業だ」と言っているが、私にとって「教師」としての生活は、まさに「フィールドワーク」そのものであった。謎と抵抗感に満ちた「教師」という仕事を、まさか自分自身が体現することになるとは夢にも思わなかった。しかし一方で、あえてその場に飛び込んでみることで、私の中の「教師」のイメージとの答え合わせができるのではないかという期待も僅かばかり持っていた。そのような不安と期待の入り混じった私の「教師」生活も、周囲の支えもあり、現在まで続けることができています。

実際に「教師」という仕事を経験して強く感じることは、「教師」という仕事はなんとも“危なっかしい”仕事であるということである。ここで言う“危なっかしい”とは、生命の危機や不祥事などの類いではない。「教師」としての自身の存在や行為自体が非常に不安定であるということである。別役実は『当世・商売往来』の中で「商売を商売とする精神は、かなり得体の知れない、アナキーなものである」と言うが、「教師」はその「商売とする精神」を自身で確立しなければならないところに、問題の根幹があるように考える。

少なくとも、教育の現場は“物は言いよう”の世界なのである。落ち着いた雰囲気なクラスは、他方で活気や自主性がなくとも考

えられ、生徒に課題をきちんとこなすことを求め続けると、他方で言われたことしかやらない、言われないとやらないようになるとも考えられる。手をかければ過保護とも思われ、手を離せば放任とも思われる。子どもの明らかで大きな成長が見られた時でさえも、他の教師であればもっと早く大きく成長できたかもしれないし、そもそも教師がいなくても子どもが自身で乗り越え成長したこともしれない。

これらは、別にいちゃもんをつけようとしているわけではない。というのも、これらはすべて一人の教師の中で起こっている問答だからである。教師が何かしら生徒へ働きかけたとき、その反作用としてこのような自問が自身へ返ってくる。

正解がないのである。というより、何をもって“正解”と見なすのかという指標がないのである。それゆえ教師は、自身が行う仕事が出来たして子どもにとってよいことなのだろうか—すなわち私はきちんとした「教師」なのだろうか—と、様々な場面で日々悩む。生徒やクラスへの指導が上手くいっていると感じる時でさえ「これは本当によい状態なのだろうか」「ただ大人が扱いやすい子どもを作っているだけなのではないか」などと考えてしまう。

すると教師は、自身が子どもの為になっている—「教師」である—という何か明確なものに頼りたいという欲望に駆られる。テストや模擬試験、アンケートなどの結果、(とりわけ指導が多く必要な)子どもの成長、子どもや保護者からの評判、同僚からの評価、クラブ活動の成績…。とにかく何か客観的な外的要因から、自分は「教師」としてちゃんとやれている、自分の仕事によって子どもが成長したのだという確かな実感を欲してしまう。

しかし、これら外的要因は、いわば麻薬のようなものである。それらがよい結果の時は、気分が高揚し充実感で満たされるが、やがてまたそれを欲してしまう。反対に、思ったような結果が得られないときは「教師」としての自身の存在さえ危ぶまれる。「教師」の仕事は文字通り「子ども相手」なのだから、継続的によい結果など求められるはずもない。それにも関わらず、その子どもの仕草や言葉一つで、有頂天にも昇るし、奈落にも突き落とされる。「教師」という仕事は、なんと“危なっかしい”ことだろうか。

では「教師」という仕事はどうありえるのだろうか。“正解”がない以上、自身の拠り所を外に求めることは得策ではない。それは、よほどの楽道家か尊大な自尊心の持ち主か極度の鈍感でない限り、いずれ破綻する危険性を孕んでいる。そうではなくて、より持続可能な「教師」の在り方としては、教師—子ども間の内的関係に着目すべきであると考える。

一人一人の子どもと向き合い、対話を重ねることで、自分と子どもとの間に文脈が生まれる。初めは些細で当たり障りない内容から始まるが、時間が経ち対話を繰り返すことで、文脈はより深くなる。教師はこの文脈に基づいて、子どもに声掛けやアドバイスを行う。この文脈は、まさに「私(教師)」と「私(子ども)」とが作り出したものであり、他のどこにもない唯一のものであるから、それに対し他者がどんなに教育的メソッドやセオリーを唱えたところで門外漢である。もちろん、子どもとの対話の中で、教師自身が外的要因を求めることがあってもよいが、あくまで主体は「私(教師)」と「私(子ども)」であることを忘れてはならない。どんなに“正解”な外的要因があったとしても、それが当該の「私たち(教師・子ども)」について当てはまるかどうかは分からない。

こうして、外的要因との一定の距離をとりながら、子どもとの対話を通して編まれる文脈こそが、「教師」としての「私」の土台として頼れるものとなる。これはまた、福田の言う「私の仕事」と通じるものがある。

最後に、われわれの教育が“正解”かどうかを判断する指標が一つある。文部科学省によると、われわれは「社会がどんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動できる」人材を育成している。もしそのような人材をわれわれが多く輩出することができたならば、おそらく彼らは将来教師にはならないであろう。20年後には現在の仕事の47%がなくなるとも言われるのなら、なおさらである。「21世紀型能力」なるものを備えた彼らは、文明の思わぬ隙間を見つけ出し、そこに新たな商売を創出するであろう。すると、教師を志す人口は減少し、教員採用試験の倍率も低下する。つまり、教員採用試験の倍率がわれわれの教育の“正解”を図る1つの指標になりえるのである。その意味においては、われわれの教育は未だ“正解”に程遠いと言わざるを得ない。いつの日か、われわれの教育が“成功”を収め、教員採用試験が1倍を下回ったとき、今度は学校の方から若者に教師を売り込む時代が訪れる。すると、働き方改革など教師を取り巻く諸問題は急ピッチで改革が進み、「教師」という仕事が他の仕事と同等の地位を得ることができる。そしてこの時ようやくわれわれは「教師とは何か」という問いを、改めて考え始めることができるのである。その日が来るまで、私はもう少し「教師」の仕事続けることにする。

樋口先生には、本当にたくさんのことを教わりました。先生から頂いた言葉や思考の難しさと面白さ。今思うのは、学生時代に先生から学んだことがあったから、このような私が今でも教師としてやっていけています。「見慣れた世界」を見つめ直すこと。先生から教わったことを胸に、これからも頑張ってみます。